

<調査報告>

知多半島の虫供養大念仏と真宗和讃 (3)

坂本 要*

A Study of “DAINENBUTU” in the Chita Peninsula

SAKAMOTO Kaname*

1. 承前

この報告は「知多半島の虫供養大念仏と真宗和讃(1)」『東京家政学院筑波女子大学紀要 No.1』1997・3・1 「知多半島の虫供養大念仏と真宗和讃(2)」『東京家政学院筑波女子大学紀要 No.4』2000・3・1に続くものである。前提より大分期間が開いたので、その後の発表された報告等を補充して^(注1)、前提報告に続ける。いままでの内容は以下の通りである。

1. 愛知県知多半島の念仏行事
2. 大野谷の虫供養
 - <道場念仏>
 - <おためし>
 - <虫供養大法要>
 - <阿弥陀ほんさん>
 - <講念仏>
3. 阿久比の虫供養
 - <範囲>
 - <縁起および変遷>
 - <行事>
 - <掛け軸>

知多半島の虫供養大念仏について、もう一度概要を述べると、知多半島の虫供養大

念仏に分類される念仏行事は12ヶ所を数える^(注2)。現状では大野谷13ヶ村・阿久比谷13ヶ村・西浦14ヶ村(現3ヶ村)・東浦町(緒川)五郷が大きく、他に名和薬師寺(東海市)富木島宝珠寺(東海市)乙川海蔵寺(半田市)有脇(半田市)成岩常楽寺(半田市)枳豆志5ヶ村(武豊町・美浜町)西枳豆志5ヶ村(常滑市)がある。

これらの虫供養行事は江戸時代の地誌に文や絵として記されていた。年代順にならべていくと^(注3)

- 『張州府志』松平君山〔漢文〕
宝暦年間<1751～1764>
『張州年中行事抄』小林広林・横井時文
明和6年<1769>
『張州雑誌』内藤東甫(絵入り)
安永年間<1772～1781>
『尾張年中行事絵抄』高力猿猴庵(絵本)
文政頃<1818～1831>
『尾張名所図会』小田切春江(絵入り)
天保13年<1842>
『尾張歳時記』小田切春江
天保15年<1844>

このうち『張州府志』には「荒尾谷」「英比谷」「緒川五郷」「枳豆志諸村」とある。

* 情報コミュニケーション学部情報メディア学科、Tsukuba Gakuin University

荒尾谷は西浦13ヶ村英比谷は阿久比谷のことである。『張州年中行事抄』には智多郡虫供養として荒尾七郷他14村が8月1日より15日まで夜毎に一軒づつ14ヶ村で宿をする様子彼岸入りの行事等がこと細かく記されている。続いて英比供養同郡16ヶ村西浦とあるが阿久比谷は普通東浦というので、誤記の可能性もある。最後に「大野近辺十三ヶ村供養有。又小川・村木・石浜・生路・有脇供養あり」とある。小川は現緒川、村木は現森岡のことでこれは緒川（現東浦町）五郷をさす。有脇は半田市に入り現在別に行っている。『張州雑志』は一番よく引用されるが、西浦14ヶ村と英比（あぐい）の庄16ヶ村について記されている。英比十六ヶ村は東浦十六ヶ村とも記されている。多くは西浦の虫供養のことで絵も西浦の様子が4枚に渡って描かれている。沖に白帆が描かれているので浜に近い供養場の絵である。この絵は「知多半島の虫供養大念仏と真宗和讃（2）」に掲載した。『尾張年中行事絵抄』のものは猿猴庵が実見して書いたもののように藪村（現東海市養父町）の浜供養の様子が詳しく描かれている。念仏供養場・四所の道場・大塔婆・供養相撲場・農具市場・小間物店・生練餅の絵がある。虫供養の絵としてはもっとも詳しいものである。巻末に参考として掲載する。『尾張名所図会』の絵はこの猿猴庵の絵を弟子の小田切春江が用いたもので「藪村濱之図真」が元になっている。「知多半島の虫供養大念仏と真宗和讃（2）」に掲載してあるので比較して欲しい。『尾張歳時記』には『張州年中行事抄』の最後の部分「大野近辺十三ヶ村供養有。」以下の同じ文が記されている。このように多少の分離や廃絶はあるものの江戸中期以降は知多半島には現在と同じような虫供養行事のあったことがわかる。東浦は江戸期では阿久比谷のことを指し、現在の東浦町は緒川五郷といった。開基は戦国時代から江戸初期の伝承でそれを裏付けるものもある。〔後

述]

大野谷・阿久比谷については現状と伝承を（1）（2）で述べたので東浦町（緒川）や西浦以下を述べていこう。

2. 東浦町（緒川）

東浦は知多半島の東海岸北部の現愛知県知多郡東浦町を指し、旧緒川郷古くは小川とも記した。

明和6年<1769>『張州年中行事抄』に「小川・村木・石浜・生路・有脇供養あり」とある。元禄12年<1699>の「緒川村由緒書賞」には「先年より虫供養と申す市？立テ近村寄合念仏執行仕候、買売物ハ諸事農具類ニテ御座候、一ヶ年一度宛秋彼岸初日ニテ御座候」とあり^{（注4）}、現行も秋彼岸の初日（中日になることもある。）に行われているので、行事は続いている。縁起としては緒川地藏院蔵の閻魔画像裏書に緒川城主水野忠政父子が元和2年<1616>大阪城落城の時「阿弥陀仏一幅閻魔法王像三幅奪取来而納蠣貝地藏是以虫供養ヲ草創ス」とある、ただこの阿弥陀本尊の裏書に慶長7年<1602>に「大破表具再興為五箇邑」とありこの時に五ヶ村で修復していることになる。画像は真宗流の方便法身阿弥陀画像で、大阪城落城ではなく真宗本山の石山本願寺攻めの時持ってきたのではないかとの説もある^{（注5）}。他の掛け軸の年号や修復年からこのような江戸時代の初めに村連合として虫供養が始められたと考えられる。大野・阿久比・西浦もほぼこの時代である。

現在9月彼岸の入りもしくは中日に虫供養は行われる。旧緒川村五ヶ村の村木・緒川・石浜・生路・藤江で、掛け軸や什物は順送りに渡される。現在はテントであるが麦わらで編んだ菰で道場小屋が建てられた。古い写真では村ごとに五棟と百万遍念仏用の一棟であったようだが、石浜の例では本尊他5本の阿弥陀掛け軸のテントと十六羅漢の掛け軸

(天明元年<1781>村木村寄贈)を掛けたテント(大道場)が向かい合って建ち、真ん中に角柱の大塔婆が立てられていた。道場脇に笹につけられて「奉修南無阿弥陀仏為虫供養」と書かれた幡がたなびいている。

掛け軸は本尊を含め六幅ある。本尊以外は掛け軸の世話村がきまっている。中央には本尊にして右から村木・緒川・本尊・石浜・生路・藤江と並べられる。

方便法身阿弥陀像 裏書本文(全文は『新編東浦町誌』にのっているのので、表具再興の部分のみ記す)

尾州知多郡村木緒川石濱生路藤江五箇邑念仏供養之本尊

表具再興慶長七壬寅年<1602>二月右依大破表具為再興五箇邑

寛文十一年辛亥之歳<1671>七月於緒川村傅宗院再興(略)

元文五庚申歳<1740>日右依大破村木邑当番之節於名古屋為五箇村表具再興

文化七庚午<1810>時之肝煎開眼寺住持文山五ヶ村年寄中^(注6)

阿弥陀三尊像(村木村)

此三尊之聖像者村木邑濱島惣助依發願沓掛邑於真野代應明画工相頼而三尊之画像出来者也(略)

奉再寄付虫供養□三尊弥陀画像愛知郡部田裕福寺以小三尊聖像画工同郡沓掛邑真野勘左衛門應明奉再写之維持文化二<1805>秋以月穀旦

醫王梅堂和尚於供養道場開眼者也願主知多郡英比莊村木村中

維持文化七年□□庚午<1810>秋八月彼岸初日相営虫供養而五箇村依衆評従是廻村各々可信仰者也

方便法身阿弥陀仏像(緒川村)

尾陽州緒川村居住廓夢光童子不幸以享保八癸卯<1723>日夭死□發議(略)

享保九甲辰<1724>施主緒川村居住廓夢

光童子

阿弥陀坐像(石浜村)

江州彦根城清涼寺堅光和尚自畫讃

文政二己卯年<1819>石濱村平林孫市隠居諦音寄付

方便法身阿弥陀像(新仏・生路)

尾州知多郡村木邑緒川石濱生路藤江五箇村

念仏供養本尊古仏本尊為懸替新仏合建立者也宝曆二壬申歳<1752>依表装破損五カ村評議之上今修補者也文政七甲申歳<1824>世話郷生路村

同行中

方便法身阿弥陀像(藤江) 寄付者氏名 森岡緒川 石濱 生路 藤江 の順で多数あり。年号なし。

以上六幅が掛けられていて本尊からは白布が大塔婆につながれている。本尊は古仏とって大切にされ供養当日の昼のわずかな時間のみ掛けられる。行事は午前10時に大塔婆の前で住職による供養があり、十六羅漢像の掲げられた大道場で御詠歌講による御詠歌・百万遍の数珠繰りがあり、3時まで五村代表が参詣し、道場では双盤鉦(寛政5年<1793>石濱村中寄付)が叩かれている。3時にかたづけて次の村へ出発し、什物の入った長持六本を引き渡す。

虫供養勤行次第は開教偈・懺悔文・三帰・三竟・十善戒・發菩提真言・三昧耶真言・般若心経・諷誦文である。諷誦文に念仏が入っている。

3. 乙川(半田市)

半田市の乙川(海蔵寺・法蔵寺・光照寺)と成岩(常楽寺・大昌寺)には虫供養のときに四遍念仏を唱えた。半田市有脇(福住寺・蓮念寺)・上半田(岩滑常福院)・阿久比町の植村・大古根(現在の植大)にも四遍念仏があったといわれることから、広く分布してい

と思われる。ただ四遍念仏は虫供養以外の六斎日に唱えることが本筋であり、四遍念仏が虫供養の念仏と別であるにとらえるのが妥当であろう。

＜虫供養＞

乙川には江戸から明治にかけての四遍念仏を記した冊子があるが、それらの始めに「当村清涼山開山田翁大僧正より小左衛門伝授相成居同行各々引続ク于時寛文三年<1663>」とある。これより詳しく天明4年<1784>「念仏同行人数覚書」には「明暦元年<1655>開蔵寺田翁大僧正文ヨリ六年間小左衛門右エンキ御授ニ相成候 寛文ヨリ八四ヶ間辻念仏 延享三年<1746>ヨリ虫供養勤メニ付左之通り有志諸品申請ケニ付左ニ記ス」とある。開蔵寺は現海蔵寺で明暦元年<1655>田翁大僧正によって小左衛門に念仏を伝え、寛文三年<1663>辻念仏が始まり、延享三年<1746>虫供養になったと考えられる。小左衛門は虫供養の位牌に辰巳屋小左衛門とあり、家系は現在も続いている^(注7)。ただ文亀二年<1502>「尾州知多郡英比之古来念仏供養講番輪次之記」の阿久比組の中に乙川と有脇は入っており、この年号と記載が正しいとすると、この時には念仏供養が行われていたことになる。その後阿久比組からは分離し、寛文3年からの辻念仏に、延享3年から虫供養に四遍念仏を唱えたとも考えられる。乙川の隣の亀崎町は真宗の亀崎道場があり、乙川には時宗・浄土宗の寺がある。四遍念仏は宗旨を問わない民間主導の念仏同行である。田翁大僧正念仏伝授の可否はともかくとして、この時期に四遍念仏が伝わったのであろう。

乙川の虫供養は(曹洞宗)光照寺(時宗)法蔵寺(浄土宗)の3ヶ寺回り持ちで行われたが1981年から海蔵寺のみで行うようになった。現在海蔵寺の境内に道場小屋をたてて虫供養をする(雨天の場合本堂)が、四遍念仏を唱えられる人は近年にいなくなって絶えてしまった。

小屋は三つあり、本堂手前の大塔婆を立て三界萬霊供養の掛け軸の小屋がある。この小屋は祭壇になっていて念仏初代の辰巳屋小左衛門夫婦の位牌・四遍念仏同行者過去帳が祀ってある。向かって右に山越しの阿弥陀と一心十界曼荼羅の二幅の掛け軸の小屋・向かって左に観経曼荼羅(当麻曼荼羅)の小屋、本堂のまわり縁に7幅の掛け軸が掛けられ、本堂入り口にここの念仏を始めたとする辰巳屋小左衛門の位牌・四遍念仏過去帳が置かれている。

掛け軸の種類と裏書きは以下のとおりである。

1. 観経曼荼羅(当麻曼荼羅) マンダラさん
此一幅者當麻大曼荼羅以正図写之為四分一者也維持元文六年<1741>辛酉秋八月吉日旦出来御絵所法眼探山弟子片岡法眼幽竹齋守興書焉
于時寛延三歳<1750>次庚午秋八月中旬銘文書写之^(注8)
2. 三界萬霊(四遍念仏同行者戒名)
三界萬霊十方至念仏講中有縁無縁精霊等
昭和八年吉日 永代供養施餓鬼戒名画讚 講元杉浦光太郎
3. 一心十界曼荼羅 道淨
維持文化五年<1808>八月彼岸為再補金襴表具
尾州知多郡乙川邑念仏講中 同行頭善兵衛
4. 山越阿弥陀 道淨
維持天明六丙午歳<1786>八月彼岸之日為再補者
尾州知多郡乙川邑念仏供養同行中
5. 阿弥陀三尊像 銘裏書なし
6. 八日仏(虚空蔵菩薩 大日如来 普賢菩薩 文殊菩薩 勢至菩薩 千手観音 八幡菩薩 不動明王)
皆天天明五乙巳歳<1785>八月日

同行頭小左衛門

八日仏 尾州知多郡乙川村供養仏

7. 地獄絵 閻魔像 針の山 銘裏書なし

8. 二十五菩薩来迎図

奉寄進供養仏二十五菩薩一幅 片岡法

眼幽竹斎守興画

于皆寛延三天<1750>庚午歳仲秋廿三日

尾州知多郡乙川村當什物為于法蔵院安置者也 念仏講中

9. 阿弥陀立像 年号なし

10. 地蔵賽の河原 二菩提維持明治元年<1868>龍舎戊辰 穉彼岸日新造営

11. 千手観音像 大正拾四年穉彼岸
双盤鉦 天明四年<1784>甲辰歳六月上旬 施主新田八兵衛

以上11本の掛け軸があるが當麻曼荼羅の元文6年<1741>に書かれたものを寛延3年<1750>に写したという記録が一番古くその後50年くらいの間に主な掛け軸がそろったといえる。これによって延享3年<1746>虫供養もかたちをなしていったと思われる。

虫供養は記録によると庚申社（白山神社西横松村境）や中須賀明地（稗田近辺）でおこなわれていて明治6年より三ヶ寺（海蔵寺・法蔵院・光照寺）になり^(注9)、現在彼岸の中日一日のみで海蔵寺で行われる。現在その日に四遍同行がもっている小屋を組み立てるがかっては組み立てとかたづけで前後三日かかった。当日は朝から世話人が鉦をたたいて参詣者をむかえる。午後3時より海蔵寺・法蔵院・光照寺住職による虫封じの祈祷が行われる。大塔婆に元に砂が盛られこの砂を踏むお砂踏みがある。虫封じのあとに四遍念仏が唱えられたが、現在和讃のみで念仏は唱えられない。夕方5時ころにかたづけ、行事を終える。

<四遍念仏>

四遍念仏は格式の高いもので白木綿に白足袋で唱え親方入門してきちんと念仏を習い、同行に名を連ねた。天明からの「念仏同行人数覚書」によると天保11年に61名、明治44年までに49名の新たな同行者が記されている。^(注10) 関政治氏（大正2年生）によると最後は17名になってしまったという。4人一組になって各所に念仏をして歩くため、四遍念仏同行を解散し、道具を海蔵寺に預けた。四遍念仏は四月から七月にかけての六斎日に行う辻念仏・盆前の1日から12日までの大念仏・盆の14日15日の辻念仏それに秋彼岸中日の虫供養である。「大波（破）ニ付置換于時明治四拾貳年 四遍念仏及虫供養講元預ヶ榊原富三郎」のあとがきがある「南無阿弥陀仏」と題された和讃念仏帳に四遍念仏の日並（日程）が書かれている。四遍念仏には立ち念仏とすわり念仏があった。辻念仏は立ち念仏で六斎日に夜にまわった。ここに記されているのはすわり念仏の日である。

辻念仏勤廻り準（順）及スワリ念仏日並

- | | |
|----------------|-------|
| (一) 光照寺 観世音 | 七月九日 |
| (二) 境□東 地蔵堂 | 七月十一日 |
| (三) 八幡社 粕祭場 | 六月五日 |
| (四) 仲須賀 墓場 | 七月六日 |
| (五) 清水 如意輪観音 | 全 |
| (六) 十王堂 十休（体？） | 七月十日 |
| (七) 薬師 御仏前 | 七月八日 |
| (八) 大御堂 地蔵 | 七月十二日 |
| (九) 馬場岩 墓土 | 七月七日 |

毎年四月十五日ヨリ七月二十四日迄一ヶ月六度ツツ勤

大念仏		
観音様	四万八千日□	七月九日
同行本揃	業キ（ヲ？）リ講元ニテ	四月十五日
全	業ナヲリ	七月一日

全業アゲ 七月十五日
法蔵院盆世ガキ 七月十二日
右三本寺之内に但シーヶ寺に供養諸道具預ヶ
ニ付其供養元御禮タメ六月十五日ヒルー時相
勤ル事

盆十四日十五日辻念仏廻順

(一) 内山地蔵 (二) 前房? 地蔵 (三) 光
照寺境内墓不残 (四) 彦六コウシ (五) 元薬
師地蔵 (六) 法蔵院境内墓不残 (七) 喜左衛
門? 観世音 (八) 釈迦堂塚 (九) 元□家裏地
蔵 (十) 海蔵寺境内墓房? 不残 (十一) 稲葉
墓 (十二) 金剛□地蔵 (十三) 西之宮地蔵池
牛観音 (十四) 大坂墓供養場青面金剛堂 (十五)
彦次弘法大師 (十六) 無地原アナコウシン堂
(十七) 原喜代前田角
他郷 飯森観音堂地蔵堂墓 新井観音堂墓
平地観音堂地蔵堂墓 向山観音堂地蔵堂墓
中次賀畑之内小女郎塚

四遍念仏は六斎念仏の中の一つの念仏で他
に白毫・阪東・誓願寺等の曲があり、乙川で
はこれらの語は和讃としてある。六斎念仏は
月に六回の持斎をするというもので、8日14
日15日23日29日晦日の日があてられて、この
日念仏を唱える。「毎年四月十五日ヨリ七月
二十四日迄一ヶ月六度ツツ勤」とはこのこと
と見られる。大念仏は1日から始まったが、
最後は光照寺で終わったとか13日六地蔵前
「墓あがり」をしたとか変動があったよう
である。盆は14日講元で大念仏を唱えたあと「志
銅」といって寄付をしてくれた家(新精霊の
ある家)を回り、書かれているような辻念仏
は1日から回ったという。このように四月か
ら盆にかけて村の辻や墓・寺堂を毎日のよう
に昼夜まわって唱えるのが四遍念仏であり、
まさに修行の名に値しよう。

四遍念仏の念仏帳は古いものが何冊かあ
る。年号のはっきりしたもの、先ほど紹介
した明治42年のものと明治44年のものがあ

る。42年が84丁、44年が28丁である。

42年の始めに「和讃目録」とあって次のよ
うに記されている。

(一) 融通念仏 (二) せいがんじ (三) 全
中之経 (四) まんだら<當麻曼荼羅> (五)
善光寺ワサン (六) 野辺送り (七) 野辺送り
ごや<後夜> (八) たいばほん<提婆品> (九)
五輪くどき (十) 悪助ワサン (十一) 釘念仏
(十二) 西河原 (十三) 富士ワサン (十四)
血盆経

(十五) 洗イながし 年々辻念仏勤行場
(十六) やまと身売り 全大念仏勤行場
(十七) 板東身売り 盆十四五日念仏勤
行場
(十八) 観経 他郷廻り
(十九) 拾六羅漢 建念仏
(二十) せいをんぼう<西王母>
(廿一) 七つ子ワサン

馬詰<不産女>

このあとにさきほどの「辻念仏勤廻順」と
いう内容があり、次に8丁にわたる「南無阿
弥陀仏」の繰り返し最後に「大オロシ念仏」
がある。

以上であるが一の「融通念仏」と「南無阿
弥陀仏」8丁以外は和讃である。一の融通念
仏は経文や十三仏に「融通念仏ナムアマミダ」
の繰り返しをはさんで唱えられるもので、融
通念仏として広く分布している。「上ゲ」「下
ゲ」「丁子(調子)」「脇」というような六斎
念仏独特の符丁もかかっている。調子とは調
子をとる音頭取り、脇とは側ともいい音頭取
りについていく念仏衆である。アゲ・サゲは
念仏の調子で融通念仏はナムアマミダンブツ・
ナムアマミダーイヨと尻の部分にアクセントが
かかるがその符丁も書かれている。

最後の方にある8丁にわたる南無阿弥陀仏
は「南無阿弥陀仏」の印判のようなものであ
らわされているが、これが引声念仏系の六斎
念仏の四遍である。南無阿弥陀仏を長く引い
て唱える詠唱念仏で南無阿弥陀仏を4回一区

切りになっているので四遍といわれる。符丁に「丁子<調子>」「ハキ<脇>」が各所「中アゲ」「大アゲ」「サゲ」「オクリ」等の符丁、語尾の指示等相当に細かい教本である。残念ながらこれを唱えられる人はいなくなり、和讃が主になってしまったようだ。

和讃の種類は唱える場所ごとに変えたため、すべてを唱えるわけではない。場所が指示されているのもあれば、盆供養の場合男性・女性・子供・産死者等によって唱え分けたという。説経節にもある「五輪くどき」や「やまと身売り」「板東身売り」等の物語り口説きも入っている。

44年のものには「ごや念仏」「西の河原」「善光寺」「融通念仏」「曼荼羅」「野辺和讃」「釘念仏」「だいはほん」「せいがん寺」「中之京」と42年とすべて重複している。

4. 成岩（半田市）

半田市の成岩もしくは西成岩の常楽寺は乙川同様、虫供養と四遍念仏で有名である。

<虫供養>

成岩常楽寺での虫供養を示す史料は少なく文化11年<1814>に虫供養用の念仏小屋である「念仏祠堂控」に七寸一丁の伏鉦を施入したという記録が一番古い。当時の虫供養がどのようなものであったかを示す史料はないが、成岩全区として念仏同行でおこなっていた^(注11)。後述するように成岩は盆を中心とする四遍念仏が盛んで若者宿の制度のもとで、村行事として行われていた。念仏同行とは四遍念仏の同行でその一環として虫供養が起こったと思われる。

虫供養は明治期に中断し、大正元年に復興し、掛け軸はこれ以降のものである。四遍念仏も昭和30年代になくなってしまったので、現在は虫供養のみが9月彼岸の中日に行われている。

大正からは常楽寺（浄土宗西山派）と無量

寿寺（真宗大谷派）の檀徒十四講を六番組に再編し当番を決め供養委員によって運営された。現在当日は三つの小屋をたて、当番が伏鉦を叩いて参詣人を迎える。

掛け軸は19本で以下のとおり（無記のものは年号なし）

1、祠堂名掛け軸（大正2年） 2、三尊阿弥陀仏 3、六字名号銘観仏 4、右に同じ5、右に同じ 6、六字名号銘播隆 7、二十五菩薩 8、名号絵文字為神農 9、羅漢（大正15年） 10、法然上人（大正15年） 11、六字名号徳本講（大正15年） 12、阿弥陀経付属此経（大正15年） 13、熊谷直実遺跡（昭和8年） 14、四国霊場（昭和12年） 15、阿弥陀画像版画中国製作福岡 16、十三仏17、四国八十八箇所（昭和33年） 18、小豆島八十八箇所 19、涅槃図

<四遍念仏>

成岩の常楽寺は浄土宗西山派の拠点として寺内4坊末寺16ヶ寺を抱える。文明16年<1484>天台宗の寺を改宗して開かれた。四遍念仏の縁起としては天文12年<1534>緒川城主の水野氏が成岩城を攻め多数の死者が出た。その戦死者を弔うために常楽寺7世の天徳慶伝<1555没>が四遍念仏をもたらしたとする。史料としては宝永6年<1709>の四遍念仏用の鉦と文政7年<1824>に四遍念仏をめぐる若者の喧嘩の文書がある。江戸中期にはかなり盛んに四遍念仏がおこなわれていた。成岩では浄土宗の家の長男は13、4歳になると念仏若屋に入り中老の指導のもと念仏の稽古に励んだ。成岩5村のうち四遍があるのは西成岩・板山・北村の三つの村で、それぞれ宿があった。このように年齢階梯制に念仏組織が組み込まれ、若者は四遍若衆といわれ四遍念仏・中老は謠念仏（和讃）というように伝承された。四遍念仏は四月から七月の六斎日に村内6ヶ所をまわる。7月1日から6日までは初盆の家をまわり、7日からは一般の家をまわった。13日から15日は笠に袴姿

で脇差を差し草履を履いて各家の戸口に立ち念仏を唱えた。三人一組で大鉦一丁で唱え数組でまわった。15日の最後に常楽寺に3ヶ町が集まり四遍を唱える。本堂の西山派の白木念仏という双盤念仏と境内では同時に四遍が唱えられる^(注12)。

一方中老は謡念仏と言って主に和讃のものを盆の14日15日に四遍同行の家をまわる。和讃には27通りあるといわれるが、乙川と共通したものが多^(注13)。

このように成岩の四遍念仏は乙川より早くなってしまったので実際の様子がわからなくなってしまった部分もあるが、行事は似たものであった。

5. 枳豆志 (武豊町・美浜町)

豊武町の長尾・大足・富貴と美浜町の布土は枳豆志(きずし)荘といわれたところで、この5ヶ村で虫供養を行っている。宝永年間<1751～1764>に書かれた『張州府志』の虫供養に「枳豆志諸村」が入っており、その頃には何らかの形で虫供養が行われていた。長尾→大足→大高→富貴→布土の順で各村の寺で秋の彼岸の中日に行う。布土は曹洞宗新月斎で行う。枳豆志の虫送りは村の役員以外大峰山上講と観音講が合同で行うため、多くの人でにぎわう。山上講は大峰の修験の講で7月の最終の土日に大峰に登り、この虫供養の日に歌読みを行う。歌詠みとは山上講の御詠歌で先達の音頭で歌い上げる。講員は60名ほど。観音講は西国33箇所や知多半島新四国八十八箇所を回る講でやはり60名ほどである。それに5ヶ村役員当番村役員の40名をさらに曹洞宗の梅花講を加えて法要をする。法要は11時から住職による読経と各団体の御詠歌で午後3時から山上講の歌詠みがある。最後に餅撒きが行われる。

境内には阿弥陀如来・役行者・観音を賛嘆する大卒塔婆3本が立てられ、本堂前面に光

明真言と南無阿弥陀仏の六字が入った掛け軸、祐天上人の六字名号の掛け軸、役行者像の掛け軸が掛けられている。いずれも新しく5メートルほどの大掛け軸である。虫供養は古くからあったものだが、山上講観音講との合同の大行事になっている。

また各村では7、8月にウンカ送りといって松明で虫を祓うことをするが、9月彼岸はその虫を供養するのだといっている。

<四遍念仏>

なお布土の上村(うえむら)には戦前まで四遍念仏があった。若い衆の念仏で青年団が寒中に辻念仏を行っていた。8枚の鉦で4人4人で向き合って叩く、2組あり一つの辻が終わると次の辻は別の組が叩くというように行っていた。2組で十数人で叩く。念仏は南無阿弥陀仏のみであった。

6. 西浦

『張州雑志』や『尾張年中行事絵抄』『尾張名所図会』に載っている図は西浦の虫供養のもので、『尾張年中行事絵抄』には「西浦虫供養藪村濱の図真」(巻末 参考2 絵図)となっている。現東海市養父町のことで、見世物小屋や笠や骨董品・餅を売る店がえがかれている。『尾張名所図会』には他に小間物・呉服・太物・農具の店や相撲場があり、多くの群衆が所狭しと描かれている。江戸時代にはこのような大変な賑わいだった事がうかがえる。この西浦十四ヶ村による大規模な虫供養は明治9年に解散し、現在清水・姫島・寺本三ヶ村持ち回りで虫供養を行っている。他に「阿弥陀さん」といって彼岸や正月に掛け軸をかけて念仏を唱える行事が名和や富木島に残っている。

西浦十四ヶ村とは藪・横須賀・大里・名和・大高・長草・吉川・木田・荒尾・姫島・半月・加木屋・寺本・佐布里の14で荒尾は七郷といつてさらに細かく分かれている。北は名古屋市

大高から大府市東部・東海市全域・知多市北部の寺本・佐布里に至る、旧知多郡の北部一帯という広い範囲の連合である。

寛政11年<1799>の「知多郡西浦十四ヶ村供養由来」^(注14)他『張州雑誌』『張州年中行事抄』等に記載しているが大きく分けて二つの縁起譚がある。「知多郡西浦十四ヶ村供養由来」には二つの縁起譚が載っている。年号や話につじつまの合わないところがある。それをまとめたものに弘化2年<1845>の「清水念仏縁起書」がある。それによると永禄7年<1564>武田信玄の足軽で清水村の九郎三郎という者が駿河の手越という所で松の根元に光っていた阿弥陀如来の絵一幅を家に持ち帰った。一方元亀2年<1571>は姫島出身で秀吉の足軽だった衛門三郎という人が比叡山の坂本より観音・勢至像を持ち帰り、庵を開いた。あるときこの三像が横川の恵心僧都源信が描いたものであることがわかり念仏講で祀るようになったという。もう一つの話は天正年間<1573～92>武田信玄の家臣青木八郎左衛門将盛が伊勢国で阿弥陀三尊像を見つけ自ら法楽太夫と名乗り藪村にいたり融通念仏を広めたというものである。「知多郡西浦十四ヶ村供養由来」によると法楽太夫は「しゅしゅくりのくわんにん(数珠繰りの願人)」で慶長7年<1602>に亡くなったとある。虫供養を始めたのは別人で天正4年<1576>横須賀の長源和尚としている。各地区の縁起譚同様戦国時代末から江戸初期の掛け軸発見譚になっている。また寺本村の孫市というものが駿河の国から陣太鼓を奪ってきて鉦とあわせて大念仏を始めたときしている。

前述のように明治9年に十四ヶ村としての虫供養行事はなくなり、寺本他いくつかの地区で断続的につづけられていたようだが、昭和24年寺本・清水・姫島の三地区合同で持ち回りの虫供養を秋彼岸の中日に行うようになった。持ち寄る掛け軸は清水・阿弥陀如来、

寺本・観音菩薩、姫島・勢至菩薩で行う場所には清水・清水寺、寺本・常光院、姫島・玄猷寺である。掛け軸は煤けているが中央に清水の阿弥陀如来立像、右に寺本の観音像、左に姫島の勢至像の阿弥陀三尊を本物として、左端に古物の観音、本尊の三尊に続く左に阿弥陀・勢至像とさらに三尊が並ぶ。柱を隔てた部屋には勢至像・十三仏・弥陀三尊(昭和14年)弥陀三尊(昭和5年)弥陀三尊(昭和14年)弥陀三尊(万延元年<1860>)の掛け軸が掛けられている。本尊掛け軸の前には「清水村九郎三郎」「姫嶋村右衛門三郎」「寺本村孫市」と俗名の記された三位牌が並ぶ。いずれも「知多郡西浦十四ヶ村供養由来」に記された人々である。

念仏は懺悔文・十三仏・光明遍照等の真言宗系の在家勤行經典の合間合間に十返の南無阿弥陀仏の名号を唱える「念仏経」の経本が共通のものとしてある。

念仏経

懺悔文(略)

念仏経

南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏
南無三世諸仏 二十五菩薩 不動 釈迦 文殊普賢 地藏 弥勒 薬師 観音 勢至 阿弥陀 阿闍 大日 虚空蔵

光明遍照十方世界念仏衆生撰取不捨

南無阿弥陀仏(十遍)

願以此功德 平等施一切 同發菩提心 光明遍照十方世界念仏衆生撰取不捨

南無阿弥陀仏(十遍)

阿字十方三世仏 弥字一切諸菩薩 陀字八万諸聖経 皆悉阿弥陀仏

願以此功德 平等施一切 同發菩提心 往生安楽 諸行無常 是生滅法 生滅滅已 寂滅為楽

迷故三界城 一念弥陀仏 即滅無量罪 現世無為楽

後生正定聚 入定同行諸共 悉皆成仏

奉敬御回向西方無量寿阿弥陀如来様へ

奉敬拝御脇立大慈大悲観世音菩薩徳大勢至菩薩様へ

奉敬拝二十五菩薩十三仏様へ 奉敬拝善光寺阿弥陀如来様へ 奉敬拝西国三十三所観音様へ

奉敬拝秩父板東百観音様へ 奉敬四国八十八所高野山弘法大師様へ

奉敬拝高祖承陽大師様へ 奉敬拝太祖常済大師様へ 奉敬拝太祖常済大師様へ

奉敬拝御先祖累代諸精霊有縁無縁精霊様無残頓生菩提と

奉敬只今一座大念仏は(戒名)何回忌之為菩提也有難南無阿弥陀仏功德諸人快樂入仏道七世之父母迄南無三界万霊平等利益乃至法界有縁無縁之精霊迄此大念仏大善根也

おんあぼきやー南無遍照金剛(三称)願以此功德 平等施一切 同発菩提心 往生安楽

南無阿弥陀仏(三称)

もともと虫供養は阿弥陀尊像が正月6日の紐解きから始まり12月末まで村々を毎日巡行したと『張州雑志』にある。旧8月彼岸の初日が大供養で仮道場と大木の浮塔(塔婆)を立てて供養したとあり、図はその様子を描いた。

巡行という形は各地区の「阿弥陀さん」という行事に受け継がれている。清水では毎月14日に順に各家を宿とし、阿弥陀三尊他徳本行者・善光寺如来・火伏せ観音他5本の掛け軸を掛け百万遍をする。正月4日が初阿弥陀で7月20日は土用干しである。姫島では毎月16日念仏講といって各家をまわり勢至像を掛ける。寺本では月一回掛け軸を掛ける他7月に虫干しをする。このように西浦の虫供養は断絶したが、清水・姫島・寺本の秋彼岸合同供養と弥陀さん行事にかりうじて受け継がれている。

＜富木島宝珠寺のミダさん＞

姫島に隣接する富木島町富田(貴船山)の

宝珠寺は融通念仏宗の祖、良忍上人の生誕地富田の館に建てられた寺といわれる。この寺にも弥陀さんという念仏行事がある。もともとこの地は荒尾・富木島六ヶ村と言われまともて十四ヶ村の一地区になっていた。六ヶ村は平嶋・渡内(わたうち)・寺中・木庭(こんば)・加家(かけ)・富田で宝珠寺は富田にある。春秋彼岸の中日を除いて6日間持ち回りで念仏を唱える。ハテの日最後の日には宝珠寺出を行う。阿弥陀観音勢至の三幅の掛け軸に、竜・虎・梅斎達磨三幅(寛政8年<1796>)の画が飾られる。また元禄15年<1702>の大花瓶があり達磨の掛け軸とも尾張藩二代目の徳川光友公の下賜されたものといわれている。大花瓶には「奉寄進念仏講中 尾州智多郡西浦十四村 融通大念仏本尊 後宝前為菩提 元禄十五壬午歳八月彼岸日」とある。これは宝暦4年<1754>の十四カ村虫供養宝物目録にあるもので、虫供養解散の節、宝珠寺に渡ったものであろう。念仏は清水・姫島・寺本と同じものであるが、「只今一遍の大念仏は融通念仏開祖良忍上人聖応大師様へ供養の為回向を敬拝奉る」の句が入る。

＜名和薬師寺のミダさん＞

東海市上名和六組(西・中・北垣外・東・南垣外・南屋敷)で行う弥陀さんで、正月8日に6本の掛け軸をもってまわる。トッカン念仏といい、早口で念仏を唱える。普段掛け軸は薬師寺に保管され、正月8日、7月20日土用の虫干し、盆の16日に百万遍をする。戦前は毎月16日に6月15日のギオンの日に虫送りをした。薬師寺は曹洞宗で2人の庵主さんがいる。

7. 日長・岡田・松原の阿弥陀講

知多市の日長・岡田・松原(現新舞子)地区には阿弥陀講という虫供養行事がある。大野十二カ村の虫供養を大供養というのに対して小供養といわれているもので、大野虫供養

の影響を受けて成立したといえる。縁起では大野佐治家滅亡の際し大野城主四代目与九郎一成が伊勢に逃亡し、そこで藤万というものに掛け軸を授けた。藤万（山伏といわれる）はそれを森村里東に祀ったところ、この地区だけウンカの被害がなかったという事で現在まで続けている。7ヶ村の供養で岡田（里・中・奥）山奥（日長一区）里東（日長二区）山中（日長一区）鍛冶屋（日長三区）里西（日長二区）松原（上ヶ松原・下松原）になっていて、7年に一度当番がまわってくる。さらに岡田は三組に、松原は二組にわかれて当番に当たっている。虫供養は秋彼岸の入りを受けて正月の1日から3日の夕方まで行う。これとは別に月念仏があり、寛永2年<1625>の日割りの念仏供養当番表がある^(注15)。この当番表では個人と村が混在しているが、7ヶ村を決められた日にまわったようである。鍛冶屋8日、岡田中17日、岡田奥18日、岡田里19日というように行って年寄りが唱えるので年寄り念仏ともいう。掛け軸は20本以上あるが、虫供養の時は13本、月念仏は3本を掛ける。13本は以下のとおりである^(注16)。

達磨大師（安永9年<1780>）・釈迦如来（安永9年<1780>）薬師如来・善光寺如来・阿弥陀如来恵心・六字名号・十三仏（寛政8年<1796>）六字名号（安永9年<1780>）三十三所観音（寛永9年<1632>）阿弥陀如来新仏唯心・阿弥陀如来新仏恵心・正一位秋葉神社

念仏は唱えられなくなった講もあるので岡田中組年寄り念仏を参考にする。般若心経・舍利礼文・光明遍照の在家勤行経典に現世利益和讃、地藏・多聞天（毘沙門天）等の陀羅尼を唱える。岡田中組は毘沙門堂で念仏を行っており近くには地藏も祀られている。このことを考えると日長・岡田・松原の小供養は大野大念仏同様現世利益和讃を中心とした

念仏であるといえよう。

松原は大野谷の虫供養にも入っている。

8. 西沢豆志（きずし）の虫つ講

常滑市南部の西沢豆志の樽水・熊野・西阿野・古場・檜原・刈谷・大谷・小鈴谷・広目各村落には虫つ講といって阿弥陀の掛け軸を掛けて念仏を唱える行事があった。これらの村で当番を決め掛け軸他の諸道具をまわしていた。明治14年西阿野の称名寺（浄土宗西山派）の当番の時火災にあい、すべてをなくしてしまった。称名寺と樽水の洞雲寺（浄土宗西山派）の両寺の呼びかけで阿弥陀・地藏・善光寺如来の掛け軸を新たに作り、交代で行事を復活した。それも昭和15年頃で終わってしまった^(注17)。縁起によると六佐という人がたばこの火で虫を殺してしまい、その供養に始めたとあり、称名寺の過去帳の最後の頁に「六佐念仏」と記載されている。虫つ講の念仏はこの六佐にちなむ念仏であるからと言われる。妙な縁起であるが「虫つ講」すなわち「虫供養」の念仏が「ろくさ念仏」すなわち「六斎念仏」に始まると解すれば納得のいく話である。現在この地区には虫供養の念仏は行っていない。

9. 全体をとおして

以上11地区の虫供養と思われる行事を記述・説明してきたがもう一度知多半島の虫供養大念仏の全体をとおして項目ごとに考察してみよう。

<縁起から>

縁起書は阿久比・西浦・大野・緒川に伝えられている。それぞれ縁起はことなるが阿久比以外は戦国末期の大野城佐治氏、緒川城水野氏にまつわる話である。阿久比の話は平安時代に菅原道真の九州配流にともないその子孫も配流になった。当時都から離れていた知

多半島はこのような配流の地だったため四男（長男の子との説もある）の淳茂こと阿久比丸が流されそのまま留まり、この地で没した。その霊を供養するために始めた念仏という。柳田国男は『毛坊主考』の中の「実盛塚」の最後にこの知多の虫供養をとりあげ、「英比殿は英雄であるからその死霊が虫になることは難しいが、念仏講が相応の理屈をつけて虫の害を御霊の所為としたのだろう」としている（注18）。阿久比丸は配流の末に死に雷神（天神）となって崇った道真同様、御霊神として扱われたのであろう。阿久比丸の實在の可否も問われているが実盛（サネモリ）や道真（ミチザネ）といったサのつく歴史上の人物は虫害御霊説に結びつく。サは稲魂だからというのが柳田説で菅原道真の一族である阿久比丸伝承もその一環と見られる。民俗行事でみると知多半島から豊田市にかけてはウンカ送り・虫送りと呼ばれて6から7月にかけて田の虫を追う儀礼の多いところである。布土のように9月の虫供養は7月の虫送りを受けて追われて死んだ虫の供養であると説明しているところもある。

さて史実にのつとる縁起は大野、日長・岡田、西浦、緒川である。そのうち大野、日長岡田は大野落城（天正10年ころ<1582>）の折、大野城主佐治興九郎一成が本尊として持ち出したもの、もしくは伊勢に逃げた時に手渡したものとなっている。大野ではその掛け軸が松に掛かっていたのを土井伝右衛門が見つけた戦死者の供養を行ったという。日長では山伏といわれる藤万という人が掛け軸をもたらしたとしている。緒川・西浦では戦乱に乗じて掛け軸をもってきたと言う話になっている。西浦で九郎三郎という足軽が駿河から、衛門三郎と言う人が比叡山の坂本から、青木八郎左衛門が伊勢で見つけ弥陀三尊の掛け軸をもたらしたとされている。永禄7年・元亀2年・天正年間で1564～1592年頃の話である。緒川は城主水野氏が石山本願寺合戦が大

阪の陣で本願寺もしくは大阪城からもってきたものといわれ、真宗の方便法身像で頭光のある阿弥陀像である。もってきたのは慶長2年<1602>以前と思われる。このように戦国末期から安土桃山の動乱期に戦場からもたらされたという伝承で、いずれも戦死者を弔うとの意があった。日長のようにこれを祀ったらウンカがこなかったと虫供養に結びつけているところもある。これも虫害御霊説の一環であろう。比叡山坂本からとか伊勢からとするのは後にのべるが天台宗系の念仏や三重県津市に本拠をおく真宗高田派のことを念頭に置く必要がある。

<史料から>

このような縁起伝承とは別に記録や什物・掛け軸として残っているものを見ていこう。一番古い記録は阿久比の「英比谷古来念仏供養講番輪次之記録」で文亀二年<1502>八月彼岸中日阿久比郷を中心とする22ヶ所の当番が差定として記されている。次に述べる大野の定板のようなものであった可能性もあるが、現物はなく昭和29年に阿久比郷土史編纂委員会の出した『阿久比谷虫供養記』に載っている。次は大野に残る定板で阿久比同様当番表で元和2年<1616>3月15日で板の彫られていて、現存する。同期のものとして初穂料として米を集めた一升拵と五合拵が大事に保存されている。同様に板に彫られた念仏供養当番表が日長にある。寛政2年<1625>のものである。

掛け軸は本尊とか古仏といわれているものは煤けて画像そのものが判別できないものが多い。特に大野・西浦のものは判別できない（注19）。したがって裏書き等によってわかったものだけの比較になる。最古のものは緒川の方便法身阿弥陀像で裏書に慶長7年<1602>に表具再興したという記録が書かれていて元の画はそれ以前であろう。阿久比の中央に掛けられる山越しの阿弥陀像が元和3年<1617>で古い部類である。『阿久比谷虫

供養記』にある「御絵改覚」（宝暦頃）には元禄年中と記された掛け軸が3本、元文年間と記されたものが1本ある。あとは判明するのは1700年以降のものが多い。古いものほとんどは判明できず残念である。他に什物としては富木島の宝珠寺にある尾張藩主徳川光友公より下賜されたという元禄15年<1702>の大花瓶がある。

これより言えるのは大野・西浦・日長では17世紀初頭すなわち江戸時代に入るところには当番表ができていまのような連合村による念仏行事が展開されていたといえよう。掛け軸の古いものは判明しないがそのころには弥陀を本尊とする掛け軸はそろっていたと思われる。

阿久比の文亀2年の定板が確かなものであるとするとさらに100年さかのぼることができる。

<行事から>

虫供養の行事の具体例が書かれているのは地誌類の記述による。『張州府志』の記述からなので宝暦年間1751年頃からであるであるが、阿久比の記録には元和年間のものがある。「元和年中以来英比月順念仏講番之日記」とあるもので、

月之三日者萩宮津両邨之講元 七日は八日八日八日草木村者坂部村九日者矢口十日菟山十四日者高岡十五日者椋原十六日者比江宮十八日者板山廿日者角岡廿七日者福住廿八日者白澤村毎種彼岸中日供養当番次序

以下 干支年による村名が続く

このように毎月日を決めて行う念仏と秋彼岸中日の念仏があり、彼岸中日の念仏は干支ごとに村が決まっており十二年で一巡する。

『張州雑志』には西浦のことが載っており正月日より14ヶ村を毎日まわる念仏と秋彼岸初日の大念仏が記されている。現行でこの様子を残しているのは大野谷の供養で阿弥陀さんと呼ばれる民間人が掛け軸を入れた仏車を引きながら各家をまわる巡回念仏がある。

大念仏は彼岸の中日と12月8日から翌1月16日までの道場大念仏がある。これとは別に阿弥陀講という講念仏があり毎月決まった日に念仏講を開いている。大念仏・巡回念仏・講念仏の三つである。

日長・岡田では秋彼岸と正月3日の大念仏と月念仏がある。

西浦では14ヶ村の大念仏はなくなり3ヶ村で秋彼岸の合同念仏とミダさんという月念仏が残っている。

緒川は秋彼岸の大念仏のみで、乙川・成岩など四遍念仏のあるところでは秋彼岸の虫供養大念仏と四遍念仏講による4月から7月の辻念仏と盆念仏がある。虫供養と四遍念仏は別である。

このように見えてくると虫供養大念仏というのは秋彼岸の村連合による虫供養大念仏と村単位の月念仏（講念仏・ミダさん）と一年間の巡回念仏の三つの念仏によってなりたっている。現在巡回念仏が行われているのは大野谷だけで阿弥陀ぼんさんという民間念仏者になっている。大野谷では暮から正月にかけての道場念仏も大々的に行われている。

<念仏儀礼から>

虫供養の念仏は大きく分けて百万遍と現世利益和讃であるが、すでに唱えられなくなって鉦だけをたたとか住職をお願いをするところがあるが、この虫供養念仏は在家の人の民間仏教儀礼である。地区や行事別に見ていく。

大野谷の9月彼岸の虫供養と12月からの道場念仏は懺悔文等の勤行式に続いて「掛け軸賛嘆」といって掛け軸の名のあと念仏を繰り返す。回数は算木で数える。この間掛け軸ごとに線香をそなえる。念仏は双盤鉦を叩く。そのあとに現世利益和讃を唱える。数珠繰りはないが、什物には百万遍の数珠があり、かつて行ったと考えられる。講念仏は百万遍の数珠繰りである。巡回念仏は阿弥陀坊さんが般若心経と現世利益和讃を唱える。

阿久比では念仏を唱えながら72本の算木を積み立てていく。終わると現世利益和讃を唱える。

草木の十五日講では百万遍の数珠を練り、念仏札を数える。終わると現世利益和讃を唱える。

日長・岡田では念仏と現世利益和讃であるが、他の和讃も多い。

西浦では「念仏経」という経文が共通しているが、勤行式のあいだあいだに念仏を唱え脇で百万遍の数珠を練る。現世利益和讃はないが、寛政11年<1799>の「知多郡西浦十四ヶ村供養由来」にはその和讃のあったことが記されている。緒川は勤行式に諷誦文で諷誦文の中に念仏がある。このあと御詠歌と百万遍の数珠練りをおこなう。乙川では虫供養に四遍念仏を唱える。成岩でも虫供養にかつては四遍念仏を唱えた。枳豆志では御詠歌と山上講による歌詠みである。

このように大野・阿久比・西浦にみられるように百万遍念仏と現世利益和讃が中心に唱えられていたことがわかる。緒川・乙川・成岩・枳豆志になると四遍念仏他の要素がはいってくる。

現世利益和讃は親鸞撰述の浄土和讃の中に入っている和讃で浄土真宗で広く唱えられている(注20)。

<念仏信仰史から>

このようにまとめてきたが、この知多半島の虫供養念仏が日本の念仏信仰のどのような位置があるのかを、もう少し広い視野で眺め、さらに成立・変遷を考えていこう。

知多半島は融通念仏を始めた良忍<1072～1132>の生誕地(東海市富木島宝珠寺)があるとともに、海を隔てた津には真宗高田派の専修寺があり、一志町は天台宗中興の真盛上人<1443～1495>の生誕地である。また東の碧海郡は真宗三河門徒の拠点でもあった。さらに虫供養を行っている半田市成岩の常楽寺は浄土宗西山派の中本山でもある。名

古屋市熱田にある時宗亀井道場もあり、念仏信仰の入り組んだ地区といえる。いままでみてきたように虫供養大念仏は融通念仏、百万遍念仏・六斎念仏(四遍念仏)・真宗の現世利益和讃とざっと見ただけでもこのような念仏が混在しているといえる。しかもこの行事は在家を主体とした民間念仏で講や俗聖ともいえる阿弥陀坊さんの力によってなっている。

まず念仏信仰の流れを見てみよう。日本の念仏は円仁よりもたらされた中国五台山の五会念仏に始まるとされる。この念仏が天台宗比叡山に伝えられ声明の引声念仏として大成する。この声明魚山流の中興が良忍で、融通念仏の祖ともいわれる。

念仏を多く唱えれば良いとする百万遍念仏の考えはそれより古く、中国の道綽より始まるとされるが、日本では平安時代中期より盛んになり源信他、多くの念仏者が百万遍念仏を唱えた。百万遍には一人で百万遍唱えるものと、10人以上で合わせて百万遍唱えるものがある(注21)。融通念仏は後者で、永久5年<1117>良忍が「一人一切人、一切人一人」の偈文を感得したのに始まり、念仏の結集に役立ち、一つの運動にもなった。百万遍は唱えるだけでなく「木槵子(もくげんじ)経」にあるように数珠練りをともなう。一人で数珠の粒を数えるのを夥頭(つぶつぶり)と多くの人が輪になって数珠を練る早練(ざらざらぐり)がある。前者から後者になったように、元弘元年<1331>百万遍知恩寺の善阿が疫病を鎮めるため宮中で百万遍を行ったとある。室町時代になるとこの早練りは宮中や貴族だけではなく念仏聖によって村々に融通念仏として広まった。融通念仏は思想であり行法であるため、組織としてまとまるのは法明<1279～1349>からでさらに宗派としてまとまるのは元禄時代の融観<1649～1716>からである。その間融通念仏集団は寺をもたず講元の居宅を移動する挽き道場で

あった (注22)。

良忍の念仏は魚山流の声明で念仏は引声であったと思われる。このような声を長く引く念仏は六齋念仏に引き継がれ、六齋念仏の中に「融通念仏南無阿弥陀」の語が入る念仏がある。一方百万遍念仏では回数を多く唱えるため念仏は概して短念仏化する。六齋念仏とは逆になる。融通念仏は六齋に引き継がれた引声系の念仏と百万遍の短念仏の二つに分かれたと見られる。

六齋念仏は融通念仏が高唱化したり踊りを伴ったりすることの反動として1450年頃に生まれたもので、月6度の持齋を堅固にし威儀をただして念仏を行うという革新運動であった。空也派・高野山系・京都干菜山光福寺の浄土宗系に分かれていたようだが、光福寺は西山派の流れを引くとされるが、この三者は相互の交流もあり、その後の民間念仏の主流になる (注23)。

以上が百万遍・融通念仏・六齋念仏の流れであるが、知多半島でのこれら念仏信仰の複合を考えていこう。

10. 虫供養大念仏の成立と変遷

(1) 「知多郡西浦十四ヶ村供養由来」(寛政11年)

『尾張年中行事絵抄』でこの虫供養を説明する部分に「さて此法会には俗ばかり出て僧を用ひず」とある。今まで述べたように知多半島の念仏は民間の念仏行事であり、寺僧の関与はかなりあとになってからと考えられる。したがって寺僧の関与しなかったことを前提にこの行事の成立をみていこう。史料の中で看過できないのは、寛政11年<1799>の「知多郡西浦十四ヶ村供養由来」で記述に統一性がなく年号も前後してでたらめのように見えるが、実は諸伝承や縁起を寄せ集めてそのまま記した観が強い。逆に生のままの伝承や縁起が集めて並べられていると見ることが

できる。前半は掛け軸のいわれについてであるが、後半は行事成立のもろもろが書かれている。後半の「又何々又何々」と記述されているものを一つ一つ検討すると以下のように読み取れる。(記述されたままの文は参考として巻末参考1として載せた。)

・融通念仏

融通念仏については「当国知多郡富田村りやうゑん和尚と申名僧あり是は天台山いむろと申所御座ありゆづう念仏をつくり加茂大明神にて七日七夜の間勤給ふ明神扉ひらきあらわれ証文あり 又嵯峨と申所に比丘有此わさん難有おもひ毎日となへ世間へひろめ申候 又夏念仏と申て四月十五日より七月十五日迄百日之間村々にて勤申事候 又ゆづう念仏は常念仏といふ心也 阿弥陀如来は今御槃昌にて常念仏の御本尊と各々たつとみ尊敬いたし候」とある。

「りやうゑん和尚」は「良忍和尚」、「天台山いむろ」は「天台宗比叡山飯室」であろう。良忍は比叡山無動谷で修行し鞍馬に参籠したとなっているので地名・寺社名が異なる。飯室は念仏聖集団の拠点である。加茂大明神が扉をあけ証文をわたすのは一遍の熊野参詣の場面と混同されているのかもしれない。嵯峨は清涼寺大念仏のことであろう。

4月15日から7月15日までの念仏は乙川・成岩の四遍(六齋)念仏で行われていたもので、ここでは融通念仏の常念仏・夏念仏とされている。六齋念仏に融通念仏を含まれており、この記述に矛盾はない。この融通念仏の記述には年代がなくいつからこのような常念仏・夏念仏が始まったのかは不明である。(四遍念仏については後述)

・虫供養卒塔婆

虫供養については次のように書かれている。

「一長源和尚と申は横須賀本浄土宗学者の達者にてあまねく衆生を勸化して念仏門に入れせ給ふ年内百姓鍬鎌にてきりころす虫供養

とり行い来るよし 年久しきゆへ初はしれす
 此三尊村々へそんきやし奉りければ此如来を
 供養本尊にしかるべくとて此上人姫嶋村氷露
 という所に堂場をかさり始め給ふて今に彼岸
 の初日に村々にて相勤申也 昔は虫卒塔婆壹
 本立供養と申伝へる 此和尚天正四年九月九
 日あまくさぢんの時百余そう来たりてとうな
 んに逢たまふ夫より此等久後無住にて普齋寺
 大中禪師永昌院に隠居して御在時此寺改号し
 祥雲山長源寺と号す禪宗になされ候この和尚
 さいごの所今きりとおしと申候」要するに長
 源和尚が百姓が切り殺した虫の供養を始めた。
 昔は卒塔婆一本立てただけだったが、
 村々に阿弥陀三尊がありこれを本尊として姫
 島に道場を設け彼岸初日に供養するようにな
 った。天正4年<1576>にあまくさの陣(不明・
 水野一族が織田に滅ぼされた年)に道場が盗
 難にあい無住になったが、今長源寺として
 ある。そうすると天正のころ虫供養の卒塔婆
 を立てることによって始まったとなる。しか
 し史料の中に「虫供養」の語はなく「念仏講」
 「念仏供養」「供養」の語である。虫供養
 の名が多くでてくるのは、「知多郡緒川村由
 緒覚書」元禄12年<1699>からで^(注24)、
 その後各種地誌にも「虫供養大念仏」の語が
 現れる。これを以て元禄以前は虫供養ではな
 かったのではないかと考えられる。諸縁起に
 みられるようにこの大念仏は戦国末期の戦
 死者供養が始めにあったと思われ、その後「
 供養由来」にあるように「浄土宗学者」の達
 者のものが虫供養に結びつけてなりたつた
 と考えられる。その場合虫害怨霊説のような
 観念が基底にあったとするのが柳田国男の説
 である。事実尾張一円には6、7月に田の虫
 送り、ウンカ送りの多いところで^(注25) 枳豆
 志のように夏送った虫の供養を秋の彼岸に
 供養すると説明している所もある。また真
 宗寺院では掛け軸の虫干しを虫供養といっ
 ている所がある^(注26)。知多半島の虫供養大
 念仏も土用の虫干しに念仏を行う。

・現世利益和讃

現世利益和讃については次のようにある。

「其後蕨村法楽太夫と申念仏者あり村々へ
 めぐり人々をすすめて恵心僧都の作り給いし
 現世利益わさんをとなえしゆしゆくりのくわ
 んにん也慶長寅年死去ありし法楽将盛居士と
 回向に入申候」此部分は前述したように法楽
 太夫という数珠繰りの願人と読める。そのも
 のが村々を巡って「現世利益和讃」を唱えた。
 恵心僧都源信のつくったというのは誤りで親
 鸞撰述である。後述するように真宗和讃が念
 仏儀礼の中心であるというのはおかしいの
 で、天台宗の恵心僧都作としたのかもしれない。
 掛け軸の中の山越し阿弥陀は恵心作と伝
 えるものが多い。いずれにしろこうした、民
 間聖ともいえる妙好人のような念仏の篤信者
 がこの大念仏を支えていたのがわかる。慶長
 4年<1599>の前の頃の話である。

・村々お年越し

村々に大念仏の受け渡しが行われ、その年
 の最後に持っている村がお年越しの村とな
 る。そのことについて次のような記述がある。

「本尊御年越し壹年は清水村正音寺又壹年
 は姫嶋三盛庵なり其後浄土宗とて御年越し可
 然とて大里村常蓮寺にて十年はかり御年越し
 なり村々の庵人追評定して毎年此寺にはかり
 にて御年越しなれば後々は常蓮寺什物の本尊
 也といふことならんとて供養本之村々にて御
 年越可然と評定相極り万治三年寅正月六日
 より荒尾谷加家村観音寺にて御紐解はしめ申
 也」

これは西浦の組で毎年御年越として大念仏
 の道具を申し渡していたのに浄土宗の常蓮寺
 で十年も持ち続けていたことがあった。この
 ままでは寺の什物とされかねないので、村々
 で評定してまた毎年申し渡すことにしたとい
 う記事である。万治3年<1660>のことである。
 すでに大野谷では元和2年<1616>に当
 番村を記した定板(ていた)があり現存して
 いる。日長でも寛永2年<1625>の同様の定

板がある。このように江戸時代のごく初期に村落連合による供養念仏が行われていた。これを下からの惣村体制の拡張とみなすのか、上からの幕藩体制の成立をめざす動きとみるのかは論が分かれる。しかし禁止や触書類は残っていないところからみると、真宗にみられる同行村の形成と同じように村連合の形成されていく一還ととらえることができよう(注27)。

・村々送り念仏(巡回念仏)

毎日念仏が巡回することについて以下のような記述がある。

「又寺本村孫市と申もの駿河の国御ぢんの節太鼓を奪いきたり今に陣太鼓と鉦をあわせて揃(ひょうし)て老若男女あつまりて大念仏となへ村々へわり付毎月毎夜村々へ如来を送り大念仏申御事なり」

現行の阿弥陀坊さんのまわる巡回念仏とは少し様子がことなるが毎夜どこかで念仏を集まって唱えるということがあったようである。

このように「知多郡西浦十四ヶ村供養由来」をばらばらにして読み取ることで虫送り大念仏の初期の様子が大分わかるのではないかと。融通念仏に虫供養・現世利益和讃が加わり、組織的にも村をこえた念仏連合のできる様子がわかる。

次にここには書かれていなかった四遍念仏について考察する。

・四遍念仏(六斎念仏)

四遍念仏とは融通念仏のことで夏念仏・常念仏と書いてあるのがそうであろうと思われる。

成岩の『常楽寺五百年誌』(注28)には常楽寺七世の天徳上人が永禄2年<1559>に始めたとしている。乙川では海蔵寺(曹洞宗)の田翁和尚が寛文3年<1663>に虫供養を再興したとある。このことについて小川和美は曹洞宗で何故に念仏を広めたのかという疑問を提示しているが、鈴木泰山は田翁

和尚は和讃を作ったのではないかとしている(注29)。現在残っている四遍念仏帳の大部分が和讃であり、最後の方に四遍念仏が書かれていることから、鈴木説のほうが説得力がある。乙川では虫送りの前に四遍念仏があり、これは4月から7月および盆の念仏を中心としたので、虫供養とは別であった。田翁和尚が虫供養の和讃を作り、四遍念仏も虫供養に唱えられようになったとするのが妥当であろう。成岩でも同様で虫供養を示すものは文化年間の鉦より古い史料はなく四遍念仏が先行していた。四遍念仏は六斎念仏であり、融通念仏に重なって全国的に1450年以降に全国的にひろまったと考えられている。その拠点の一つが京都光福寺で永正年中<1504～1521>に六斎念仏の惣本寺として勅許されたとある。この寺の開祖道空は西山派証空の法系をひくもとの伝書があり、六斎念仏は浄土宗西山派を通じてひろまった。知多半島にはこの西山派の寺院が多くその中本山が常楽寺である。常滑市南部の西積豆志の虫供養の寺はこの西山派が多く、そのひとつ称名寺には六佐(ろくさ)念仏の伝承があり、この地区でも六斎念仏(四遍念仏)のさかんだったことがわかる。この四遍念仏は虫供養の大念仏とは別に西山派を通じて4月から7月の六斎日の融通念仏・盆の融通念仏として広まったと考えられる。

(2) 宗派の関与

何度もいうようだがこの虫供養大念仏は民間の念仏であり、しかも江戸幕府による宗派別支配の始まる前に基本的な形態ができあがった行事であるといえる。ただ江戸時代に入ると宗派別の動きもはっきりしてくる。浄土宗西山派について述べたが他に真宗高田派・天台宗真盛派・曹洞宗の影響が考えられる。この知多半島の虫供養大念仏については柳田国男・五来重が断片的に紹介しているが(注30)、論考いうものが少なく唯一鈴木泰山の「尾州知多郡阿久比谷の虫供養につい

て」がある（注31）。その中で指摘されたのは天台宗真盛派・曹洞宗の関与である。天台宗については阿久比の元和3年<1617>といわれる本尊が山越しの阿弥陀という天台系浄土信仰に基づいていること、『知多郡史』（愛知県知多郡役所刊・大正12年）の「知多半島の仏教」に天台真盛上人が虫供養を中興したということを述べているが、『知多郡史』の記述には具体性はない。論では阿久比坂卯之山の最勝寺が拠点ではないかとしている。天台宗の影響については知多半島にはもともと天台寺院が多かったが近世になって浄土や曹洞宗に変わっている。また良忍の直接の影響はなかったと思われるが、良忍上人は天台声明・引声念仏の中興なので、山越阿弥陀や二十五菩薩といった天台浄土の掛け軸を本尊にした可能性は高い。また現世利益和讃を恵心僧都源信の作としたり恵心の筆によるという掛け軸が多いのは天台宗が影響している。真盛上人については知多半島対岸の一志町の出身で近江坂本の西教寺を本山として一派をなしたが、安濃津（現津市）西来寺を拠点にした活動も盛んであったため、知多半島への影響は当然考えられる。

曹洞宗については現今の教本の中に禅宗の勤行経典が入っていたり、西浦の「念仏経」に承陽大師一道元、常済大師一瑩山紹瑾の勅賜号が入っている。このことから大念仏に曹洞宗の寺や僧侶が関与して「念仏経」なる経典を作ったと考えられるが、承陽大師・常済大師の号は明治天皇から賜ったものなので、この「念仏経」は明治以降の新しいもので曹洞宗の影響は最後であろう。

(3) 結語—真宗との関連—

真宗との関連ではこの連載の「知多半島の虫供養大念仏と真宗和讃（1）」の注5で仏飯の盛り方について述べた。真宗の仏飯の盛り方に二種類あり、円錐形と円筒形で前者が本願寺派・高田派で後者が大谷派である。大野の虫供養は高田派のものでそのための

「もっそう」という道具がある（注32）。知多半島の虫供養のうち、大野、阿久比、日長の念仏儀礼は主に百万遍と現世利益和讃で行われている。西浦も「供養由来」に見るようにかつては「現世利益和讃」があった。『張州雑誌』の絵にある道場莊嚴の鶴亀灯籠や松の生け方は真宗様式である。大野谷の莊嚴の生け花の松もそうであり、正月の莊嚴の若松は高田派の一本松といわれる生け方と同じである。

振り返っていわゆる初期真宗の道場と道場坊さん、それに掛け軸を本尊とする信仰などを比較してみるとこと、虫送り大念仏と初期真宗の組織・信仰形態が酷似していることがわかる。その理由として知多半島の対岸の津市にある高田派の影響が考えられる（注33）。高田派が津市の一身田に移ってきたのは永正年間頃<1520>、である。高田派中興の祖真恵<1434～1512>の時で天台宗の真盛とも親交があった。こういった時代状況の中で知多半島の大念仏のちの虫供養大念仏が断続的に形作られていったと考えられよう。

法明以降の融通念仏も初期真宗と同じように決まった寺を持たない道場様式と在家の「禅門」という念仏行者による形態をとっていた（注34）。ただ河内や大和で形成された融通念仏の村に比べると、「挽き道場」「禅門」「回在」という融通念仏村独特の言葉が聞けないことから、知多半島の場合それほど組織的に融通念仏が関与したとは思えない。「供養由来」に記されているような数珠繰りの願人・法楽太夫のような民間念仏者を想定するのが当を得ているだろう。宗派という概念は江戸時代からである。

『尾張年中行事絵抄』の藪村虫供養大念仏の絵の説明に、「伊勢路よりの参詣の舟も多く」と書かれている。対岸伊勢との交流は盛んであった。多くの念仏行者が伊勢湾を行き来したであろう。知多半島の供養念仏はさま

ざまな念仏行者によって融通念仏・百万遍念仏・四遍念仏がもたらされ、その念仏受容の強い風土の中で、惣村連合のような村を越える大念仏が形成され、江戸時代に入ると宗派の影響を受けながらさらに展開し大規模になった。しかし道場や巡回念仏にみられる阿弥陀坊さんのような在俗念仏者の存在は、初期の真宗高田派や中世融通念仏集団の形態に通ずるものであると言える。このように知多半島の虫供養大念仏は念仏信仰の種々相を垣間見せるとともに、近世に入る直前の民間念仏信仰の形態をよく残したものであるといえよう。

注

(注1) 前掲の2000年以降 津田豊彦執筆による、『新編東浦町史 本文編』p932～934 1998『同資料編6教育・民俗・文化』p181～223「虫供養」2001年『半田市誌 地区誌篇 乙川地区』p218～224「虫供養と四遍念仏」2007年 蒲池勢至による『愛知県史 民俗3 三河』p784～790「虫供養と念仏信仰」2008年がでている。

調査は1991年12月15日から2000年3月にかけてビデオ撮影を含め断続的に行ったもので1994年までに集中している。その間阿弥陀坊さんの清水恒明さんを始め鬼籍に入られた方も多く。その時に伺った話は貴重なものとなってしまった。

(注2) 知多半島全体の分布は「知多半島の虫供養大念仏と真宗和讃(1)」のp6に掲げたが、その後の蒲池報告には一覧表が掲げられている。11ヶ所という数は同じであるが、坂本報告では蒲池報告にはない東海市の「名和薬師寺みださん」がカウントされている。蒲池報告では逆に半田市有脇が入っているので全体では12ヶ所になる。

他に刈谷市小垣江にもあった。加藤幸一「小垣江の虫供養」『かりや』No.26 刈谷市郷土文化研究会 2005

(注3) これらの本の刊本は次のとおりである。

『張州府志』愛知県郷土資料刊行会1974『張州年中行事抄』名古屋市蓬左文庫編 名古屋市教育委員会1983『張州雑志』愛知県郷土資料刊行会1975『尾張年中行事絵抄』名古屋市蓬左文庫編 名古屋市教育委員会1988『尾張名所図会』角川書店「日本名所風俗図会6巻」1984他『尾張歳時記』三一書房「日本庶民生活史料集成23巻」1981

(注4) 津田豊彦「虫供養」『新編東浦町史 本文編』1998 東浦町誌編さん委員会 p933

(注5) 戸田純哉「東浦五ヶ村虫供養行事雑記」『郷土文化』22-1名古屋郷土文化会1967「東浦五ヶ村虫供養創始考」『東浦町誌』1968 東浦町

(注6) 『新編東浦町誌 資料編6教育・民俗・文化』p184全文は16行に及ぶ。

(注7) 津田豊彦『半田市誌 地区誌篇 乙川地区』p220(前提) 小川和美「知多の民衆信仰<半田地方の虫供養行事>」『福祉大学評論』No.34 日本福祉大学1984年4月『半田市誌』1971半田市『新修半田市誌 本編』1989半田市

(注8) この銘文については小川和美論文から引用

(注9) 『新修半田市誌 本編』1989半田市 p299

(注10) 小川和美「知多の民衆信仰<半田地方の虫供養行事>」p52

(注11) 榎原是久『西成井の虫供養』稿本 1985

(注12) この辺の細かいことの記憶は話者もはっきりせず、『成岩町誌』1936年成岩教育会 P296～303の記述によった。

(注13) 植村と成岩の念仏帳の比較は『半田市誌』1971半田市 P1000にある。また植村の四遍念仏については念仏帳の詞章を含めて『民間念仏信仰の研究 資料編』1966 仏教大学民間念仏研究会に記載されている。

(注14) 『知多市誌 資料編3』1983知多市役所 p439～445に写真版とともに記載。同様の文は養父・寺本・清水・姫島村世話人が書

- いた「阿弥陀如来縁起書」昭和4年版・昭和10年版にある。寺本・清水・姫島合同の虫供養講が保持。
- (注15) 『知多市誌 資料編三』p436に写真が載っている。
- (注16) 何本か実見したが煤けて判然としないものもあり、『知多市誌 資料編三』p433の記載によった。
- (注17) 江端祥式「西枳豆志の虫供養」『大野谷虫供養』1971 南柏谷郷土研究会
- (注18) 柳田国男「毛坊主考」大正3年<1914>『定本柳田国男集第9巻』p354 筑摩書房1969
- (注19) 2011年10月～12月に知多市歴史民俗資料館で「大野谷の文化財展」が開かれ大野谷虫供養の古仏が出展された。その際、赤外線カメラによる撮影が行われたが、画像のみで年号はなかった。
- (注20) 「現世利益和讃」は親鸞76歳の撰述で十五首和讃ともいわれ、金光明経等をもとに息災延命・七難消滅・神祇守護・信心利益等を内容としている。
- (注21) 百万遍念仏に関しては三田全信「百万遍念仏の起源と変遷」『浄土宗史の新研究』1971隆文館 奥野義雄「百万遍念仏稱唱から百万遍念仏数珠繰りにへ」『奈良県立民俗博物館紀要』No. 2 1978
- (注22) 融通念仏集団・融通念仏宗の成立については奥村隆彦「融通念仏信仰の展開と種々相」『融通念仏信仰の歴史と美術—論考編』2000東京美術 戸田孝重「良忍の融通念仏創唱について」『天台学報』No.45 2002 神埼寿弘「融通大通について—元禄期の融通念仏宗」『印度学仏教学研究』50-2 2002 『錦溪山極楽寺史』大阪府河内長野市極楽寺宗教文化研究所 1995
- (注23) 六斎念仏については五来重「融通念仏・大念仏および六斎念仏」『大谷大学研究年報』No.10 大谷学会1957 植木行宣「京都の六斎念仏関係資料」『京都の六斎念仏』京都市文化観光資源保護財団1982
- (注24) 前出210p参照『新編 東浦町誌 資料編6』p186
- (注25) 小西恒典「尾張の虫送り」『名古屋民俗』No.53 名古屋民俗研究会 2000年9月 尾張一円の虫送りの分布が示されており実盛人形の虫送りの多い。刈谷・豊明・豊田等知多半島の北部に隣接するところで濃い分布を示す。
- (注26) 滋賀県能登川町伊庭の浄土真宗妙楽寺(仏光寺派)では夏の土用の日、虫供養と称して寺所蔵の掛け軸を出して虫干しし、あわせて虫供養を行う。行事は住職による法要のあと百万遍の数珠繰り、現世利益和讃の唱え等があり、知多半島の虫供養と似ている。同じく伊庭の正厳寺(仏光寺派)でも虫供養がありここでは絵系図を出す。
- (注27) 真宗の道場地区では村が九ヶ同行、六ヶ同行として掛け軸を共有して信仰的な連合村を組むことがあり、知多半島の事例と似ている。越前穴馬村(現福井県大野郡和泉村)千葉乗隆「越前の穴馬同行」『中部山村社会の真宗』1971吉川弘文館 筆者も1992年調査に入っている。「知多半島の虫供養大念仏と真宗和讃(1)」参照
- (注28) 『常楽寺五百年誌』1983 常楽寺誌編集部では「成岩町誌」からの引用として載せている。
- (注29) 小川和美前提 鈴木泰山「尾州知多郡阿久比谷の虫供養について」『愛知大学総合郷土研究所紀要』No.9 1963→『曹洞宗の地域的展開』1993思文閣出版
- (注30) 柳田国男「毛坊主考」前提 五来重「融通念仏・大念仏および六斎念仏」前提
- (注31) 鈴木泰山「尾州知多郡阿久比谷の虫供養について」前提
- (注32) 大谷派—円筒形 本願寺派—円錐形だが先がまるい 高田派—円錐形で先がとがっている。高田専修寺ではお七夜(報恩講)や4月の十万人講や盆(歓喜会)彼岸(讃

仏会)には仏飯講が組織され在家の講の人が順番にその任にあたっている。

(注33) 高田派の民間念仏としては鈴鹿市三日市の如来寺・太子寺のオンナイ念仏があるが、六斎念仏系のナムアミダブツの声を長く引く念仏である。現在8月4日に寺周辺の辻々をまわり傘ブクを立てしゃがんで念仏をとる。居念仏・すわる念仏の一つと考えられる。

また津市白塚町東海寺にはシシコ念仏がある。1月のお七夜(報恩講)の最終日15日のお速夜に本山の専修寺にいき、念仏と「高僧和讃」を唱える。「現世利益和讃」はお速夜の通夜講から帰ってきた16日その年に亡くなった家をまわって唱える。

東海寺ははじめ西光坊という道場で、二世得裕の姉貞把が慶安3年<1650>常滑市保示の真福寺を開基している。真福寺では最近まで十五日講という念仏講があり、「現世利益和讃」が唱えられていた。というよう高田派では親鸞撰述の「現世利益和讃」を含む『三帖和讃』はなにかの時に唱えられている。

(注34) 井上寛和「古代中世の融通念仏」塩野芳夫「近世融通念仏宗と極楽寺」『錦溪山極楽寺史』前提1995

<参考文献>

- 井上寛和「古代中世の融通念仏」『錦溪山極楽寺史』大阪府河内長野市極楽寺宗教文化研究所 1995
- 植木行宣「京都の六斎念仏関係資料」『京都の六斎念仏』京都市文化観光資源保護財団1982
- 江端祥式『大野谷虫供養』1971年 南粕谷郷土研究会
- 江端祥式『大野谷虫供養南粕谷道場』1985年 南粕谷郷土研究会
- 小川和美「知多の民衆信仰<半田地方の虫供養行事>」『福祉大学評論 No.34』日本福祉大学 1984
- 奥野義雄「百万遍念仏稱唱から百万遍念仏数珠繰りへ」『奈良県立民俗博物館紀要 No.2』1978
- 奥村隆彦「融通念仏信仰の展開と種々相」『融通念仏信仰の歴史と美術—論考編』2000東京美術
- 加藤幸一「小垣江の虫供養」『かりや No.26』刈谷市郷土文化研究会 2005
- 蒲池勢至「虫供養と念仏信仰」『愛知県史 民俗3 三河』2008 愛知県史編纂室
- 神崎寿弘「融通大通について—元禄期の融通念仏宗—」『印度学仏教学研究50-2』2002
- 小西恒典「尾張の虫送り」『名古屋民俗No.53』名古屋民俗研究会 2000年9月
- 五来 重「融通念仏・大念仏および六斎念仏」『大谷大学研究年報No.10』大谷学会 1957
- 榊原是久『西成井の虫供養』稿本 1985
- 坂本 要「知多半島の虫供養大念仏と真宗和讃(1)」『東京家政学院筑波女子大学紀要 No.1』1997
- 坂本 要「知多半島の虫供養大念仏と真宗和讃(2)」『東京家政学院筑波女子大学紀要 No.4』2000
- 塩野芳夫「近世融通念仏宗と極楽寺」『錦溪山極楽寺史』大阪府河内長野市極楽寺宗教文化研究所 1995
- 鈴木泰山「尾州知多郡阿久比谷の虫供養について」『愛知大学総合郷土研究所紀要 No.9』1963→『曹洞宗の地域的展開』1993 思文閣出版
- 千葉乗隆「越前の穴馬同行」『中部山村社会の真宗』1971 吉川弘文館
- 津田豊彦「知多半島虫供養ノート」『名古屋民俗No.17』1980 名古屋民俗研究会
- 津田豊彦『新編東浦町史 本文編』1998 東浦町
- 津田豊彦「虫供養」『新編東浦町史 資料編6 教育・民俗・文化』2001 東浦町
- 津田豊彦「虫供養と四遍念仏」『半田市誌 地区誌篇 乙川地区』2007 半田市
- 戸田孝重「良忍の融通念仏創唱について」『天台学

報 No.45』2002

戸田純蔵「東浦五ヶ村虫供養行事雑記」『郷土文化
22-1』名古屋郷土文化会 1967戸田純蔵「東浦五ヶ村虫供養創始考」『東浦町誌』
1968 東浦町三田全信「百万遍念仏の起源と変遷」『浄土宗史の
新研究』1971 隆文館柳田国男「毛坊主考」<1914>『定本柳田国男集
第9巻』1969 筑摩書房

※市町村郡史・史料は本文の注参照

参考 1 寛政11年<1799>「知多郡西浦
十四ヶ村供養由来」後半部

本尊御年越し壺年は清水村正音寺又壺年は
姫嶋三盛庵なり其後浄土宗とて御年越し可然
とて大里村常蓮寺にて十年はかり御年越しな
り村々の庵人追評定して毎年此寺にはかりに
て御年越しなれば後々は常蓮寺什物の本尊也
といふことならんとて供養本之村々にて御年
越可然と評定相極り万治三年寅正月六日より
荒尾谷加家村観音寺にて御紐解はしめ申也。

一 長源和尚と申は横須賀本浄土宗学者の
達者にてあまねく衆生を勸化して念仏門に入
れせ給ふ年内百姓鍬鎌にてきりころす虫供養
とり行い来るよし年久しきゆへ初はしれず此
三尊村々へそんきやし奉りければ此如来を供
養本尊にしかるへくとて此上人姫嶋村水露と
いう所に堂場をかさりて始め給ふて今に彼岸
の初日に村々にて相勤申也昔は虫都卒婆壺本
立供養と申伝へる此和尚天正四年九月九日あ
まくさぢんの時百余そう来たりてとうなんに
逢たまふ夫より此等久後無住にて普齋寺大中
禪師永昌院に隠居して御在時此寺改号し祥雲
山長源寺と号す禅宗になされ候この和尚さい
ごの所今きりとおしと申候其後藪村法楽太夫

と申念仏者あり村々へめぐり人々をすすめて
恵心僧都の作り給いし現世利益わさんとな
えへしゆしゆくりのくわんにん也慶長寅年死
去ありし法楽将盛居士と回向に入申候又寺本
村孫市と申もの駿河の国御ぢんの節太鼓を奪
いきたり今に陣太鼓と鉦をあわせて揃（ひよ
うし）て老若男女あつまりて大念仏となへ
村々へわり付毎月毎夜村々へ如来を送り大念
仏申御事なり当国知多郡富田村りやうゑん和
尚と申名僧あり是は天台山いむろと申所御座
ありゆづう念仏をつくり加茂大明神にて七日
七夜の間勤給ふ明神扉ひらきあられ証文あ
り又嵯峨と申所に比丘有此わさん難おおもひ
毎日となへ世間へひろめ申候又夏念仏と申て
四月十五日より七月十五日迄百日之間村々に
て勤申事候又ゆづう念仏は常念仏といふ心也
阿弥陀如来は今御槃昌にて常念仏の御本尊と
各々たつとみ尊敬いたし候

参考 2 絵図 (231 ~ 235ページ)知多郡西浦虫供養藪村濱之図真 (5枚)『尾
張年中行事絵抄』高力猿猴庵

文政頃 (1818 ~ 1830) 名古屋蓬左文庫蔵









